



愛知国際児童年記念館館長賞

愛知国際児童年記念館館長 上田 貴義

国際児童年とは、国連総会が採択した「児童権利宣言」の20周年を記念して設けられ、改めて世界の子どもの問題を考え、その解決のために各国、各国民すべてが取り組んでいくというものです。

昨今、子どもたちを取り巻く環境は、私たちの子どもの頃に比べ、物的には豊かになりましたが、学校や家庭の環境などは複雑に入りこんでいるように感じます。そのような中で、この「日よう日のゆうごはん」という作品に出会い、とても心が温かくなりました。

奨さんとおうちの方とのやりとりが目に浮かび、奨さんがご両親からたくさんの愛情を受け、幸せいっぱい過ごしている様子が伝わってきます。内容は、日常生活の1コマに過ぎませんが、それは、とても大切な1コマだと感じます。このような幸せな生活を、たくさん子どもたちに過ごしてもらえよう、大人たちはしっかりと支えていかなくてはいけないと改めて感じさせられました。



国語部門

日よう日のゆうごはん

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 1年 杉浦 奨

「ぶたのひきにくを150グラムください。」
「はい、わかりました。」
おにくやさんがいました。ひとり、かいいのができてほっとしました。
今日は、日よう日です。パパとゆうごはんをつくります。…エプロンをして、手をあらってじゅんびばんたんです。とけいは、4じでした。
(中略)
ぎょうざは、フライパンできつねいろにやきました。もうすこしで、ふくろういろになりそうです。ほくが、
「もういいよ。」
といわなかったら、こげていたとおもいました。パパといっしょにつくるとドキドキします。どうしてかという、パパは、あまりりょうりがじょうずだとおもわなかった。とけいは、みたら6じでした。ママは、いつもはいいのでふしぎです。ほくもママのようにおいしいうりをはやくできるようにがんばろうとおもいます。――抜粋――



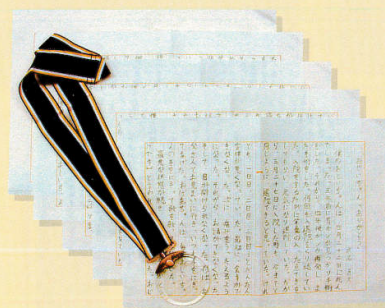
国語部門

おじいちゃん「ありがとう」

国語部門

おじいちゃん「ありがとう」

愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校 4年 武石 直大



僕のおじいちゃんは、四月二十二日に死んでしまった。(中略)
僕は、おじいちゃんの生き方を見て色々な事を覚えてもらった。一つ目は、自分が健康であることに感謝する。…二つ目は、人のやさしさに感謝する。…三つ目は、何事も最後まであきらめずに頑張る。おじいちゃんと僕は、六月に英検四級を一緒に受ける約束をしていた。最後の入院の時もおじいちゃんは、問題集を持って行っていた。最後まであきらめず、おじいちゃんは勉強をしていた。苦しくても頑張っていた。僕は、おじいちゃんが使っていた問題集をもらい、頑張ることを学んだ。
おじいちゃんが亡くなって三ヶ月が過ぎた。僕の思い出すおじいちゃんの顔はいつも笑っている。僕がくじけそうな時、「直大ガンバレ」と笑顔のおじいちゃんがかぶ。僕が頑張った時、「よく頑張ったね。えらかったね。」と笑顔で拍手をしてくれているおじいちゃんがかぶ。天国から見守ってくれているのだと思う。僕は、これからおじいちゃんの分まで頑張っていきたい。そして、おじいちゃんのような生き方をしたいと思う。――抜粋――



直大さんの態度や姿勢・眼差しと考察は涙を誘います。

おじいちゃんの「生き方」と「死」をとおして、「健康で過ごせることの幸せ」「周りの人への感謝の気持ち」「何事も最後まであきらめずにがんばることの大切さ」を学んだ直大さんの姿勢には、素直に共感させられます。

これまでも祖父母などの死を語る作品は多くありましたが、この作品はおじいちゃんの生と死、それを看取る家族を語りながら「生死と向き合う人間の尊厳、その輝き」を正確にみつめ学び取っていると読むことができます。

直大さんのようにここまで身近な人の死を深くとらえ、的確に書いた作品はなかなかないと思います。作品に、バランスの良さと骨太な印象を与えるのは、彼が家族に愛され、それを正しく受けとめてきた性格の良さのあらわれではないでしょうか。



団体賞



愛知県 愛知教育大学附属岡崎小学校



毎年、全学年をあげて多数の作品を応募していただいています。そして、コンスタントに受賞者を輩出しているのも、この愛知教育大学附属岡崎小学校の特徴です。本年度も優秀な作品が多数選出されています。

また、「国語」「生活科」「理科」「社会科」「英語」「パソコン」と全部門からの応募があり、学校全体で、子ども達の興味ややる気といった自ら研究に取り組む力を大切にされている様子が感じられます。

どの作品からも子ども達の前向きな姿勢がうかがえ、来年度の作品にも期待がもたれます。



団体賞としてKTC中央出版発刊の「子ども資料年鑑2008」が贈呈されました!